

目の前のひとりの生まれてきて良かったを、日本の医療から

JAPAN HEART NEWS



アジア小児医療センターの子どもたちと吉岡医師(カンボジア)



Japan
Heart

2026
SUMMER

- 01 : カンボジア 「新たに動き出した病院で、医療活動始まりの場所で―」
- 02 : ミャンマー 「情勢不安の続くミャンマーの人々に、医療と学びを」
- 03 : ラオス 「医療の形が整いつつある、3年間の集大成」
- 04 : 災害支援・対策 「能登半島地震中長期支援活動～慢性期の新たな支援の形～」
- 05 : スマイルスマイルプロジェクト 「ご家族のお出かけレポート・レモネードスタンド」

01 カンボジア

新たに動き出した病院で、医療活動始まりの場所で—
それぞれの地で医療を届ける

数字が証明する信頼と、まだ終わらない進化

昨年の10月31日に開院した、ジャパンハートアジア小児医療センター(Japan Heart Asia Children Medical Center:以下ACMC)。開院直後の11月では459件/月だった外来診療数も月を追うごとに件数を伸ばし、2026年3月には2844件/月と、開院直後から6倍近くの患者さんが訪れてくれるようになりました。月毎の手術件数や新規入院患者件数も開院直後の10倍近くになるなど、ACMCの存在が広く認知され、カンボジアに住む多くの方がジャパンハートを頼ってくれていることを強く実感しています。しかし、多くの患者さんが訪れてくれるからと言って、ACMCが病院として完成された訳ではありません。今もなお、さらなる機能を備えた病院となるべく、進化を続けています。



新たに導入されたCT撮影装置

2026年4月現在、新たにCT撮影装置の導入に取り組んでいます。装置が導入されれば、これまで他の病院に頼らざるを得なかったCT検査をACMCで対応できるようになり、患者さんへよりスピーディーに医療を届けることが可能になります。日本からも新たなボランティアスタッフとして放射線技師の方にACMCへ来ていただき、現地医療者へ装置の取り扱いのレクチャーも予定しています。



可愛いネイルアートに思わず笑顔

こうしたハード面の進化だけでなく、ACMCで治療を受ける子どもたちが安心して笑顔で過ごせるよう、ソフト面の充実にも私たちは積極的に取り組んでいます。3月末には、小児がん病棟に入院している子どもたち向けに、カンボジアの首都プノンペンにある美容室「和心」様にご協力いただき、ネイルサロン&マジックショーのイベントを実施しました。

カラフルに彩られた爪を見つめる笑顔や、繰り広げられるマジックに声をあげる様子は、子どもたちだけでなく、そのご両親や治療に取り組むスタッフ達にとってもかけがえのない時間となりました。

この他にも、長期入院を余儀なくされ、学習機会を失っている子どもたちのための院内学級開催にも取り組んでいます。「早く良くなって学校にいきたい」、「元気な子たちと同じように過ごしたい」そうした入院中の子どもたちの思いに寄り添う

べく始まったこのプロジェクトでは、「ICTを活用した学習(認知能力育成)」と「アート体験(非認知能力育成)」を2つの軸とし、子どもたちへ学習機会の提供を行っています。現在は現地医師が中心となり講師役を担っていますが、将来的には専門の講師を招き、プログラムの拡充にも取り組んでいく予定です。

ACMCが掲げる「子どもや家族にとって本当に良いと思える病院」「子どもが来なくなる病院」を目指し、私たちジャパンハートは歩みを止めずに更なる成長を目指します。



真剣に取り組む子どもたち

地域に根差した医療をさらに広く、深く

アジア小児医療センターのあるタクマウから車で約1時間半、東南アジア最大の河川であるメコン川に連なるトレンサップ川を北上した場所に、私たちジャパンハートがカンボジアで10年間活動してきた拠点、ジャパンハート医療センター(Japan Heart Medical Center: 以下JHMC)があります。

ACMCの開院に伴い、病院機能の一部を移転したJHMCでは、2月に病院内のレイアウトを一新し、新たな体制で無償医療提供を続けています。

カンボジアの厳しい暑さのもと、屋外で行っていた外来診療も全て屋内に移すことができ、訪れた患者さんはもちろん、医療者達も快適な環境で医療が提供できるようになりました。併せて、救急治療室の設置や病院内レイアウトの見直しも行いました。

小児治療に特化したACMCとは異なり、このJHMCでは年齢制限を設けず、子どもからお年寄りまで幅広い年代の方への医療提供を行っています。また、出張診療活動などを通じて、他病院との連携や地域医療の発展にも力を注いでいます。

今年の夏には隣接するボンネルー病院と連携した婦人健康教室や、地域ヘルスセンターでの乳がん検診なども計画しており、長年の活動によって築かれたネットワークを用いて幅広い範囲での活動に取り組んでいく予定です。

ここJHMCにて、未来を担う子どもたちはもちろんのこと、その子どもたちを育てる親世代を含めたカンボジアの地に生きる『すべての人が、生まれてきて良かったと思える世界を実現する』。そのために何ができるのか、何をすべきなのか、常に模索しながらこれからも活動に取り組んでまいります。



屋内での外来診療の様子

ジャパンハートで育まれた技術で 一人でも多くの人へ医療を届ける

一台のバンに積める限りの医療器材とスタッフを載せて地域の病院へ赴き、診療と手術活動を行うこの出張診療は、ジャパンハートがカンボジアで自前の病院を持つよりも以前、活動を開始した当初から受け継がれてきた活動です。

1月からは新たにジャパンハート医療センターから車で3時間ほど離れた、カンポントラベック病院との連携を開始。4月までに3度の出張診療活動を実施しています。

この出張診療活動では、地域の病院では対応が難しい症例の手術をジャパンハートが赴いて行うのみでなく、現地の医師へ技術指導を行うことも重要な目的の一つとしています。普段JHMCで勤務しているラタナ医師が中心となり、ボランティアで活動に参加している日本人医師とともに、地域医療の質の向上に取り組んでいます。

ラタナ医師は、ジャパンハートの奨学金事業を通じて医師となったカンボジア人の一人。これまでジャパンハートを訪れた多くの日本人医師と手術を行うことにより、着実に力を身につけ、今では出張診療活動の技術指導の中心を担うほどに成長しました。ジャパンハートで育まれた技術と想いが今、少しずつカンボジア国内へと広がりつつあります。

カンポントラベック病院の医師と手術を行うラタナ医師
(左から2番目)



近年、首都プノンペンでは資本や技術が集い、高度な医療が提供される環境が整っていますが、まだまだ地域の病院で対応できる医療範囲は限られており、課題が残っているのがカンボジアの現状です。より多くの人へ医療を届けるため、私たちは出張診療活動を続けてまいります。

02 ミャンマー 情勢不安の続くミャンマーの人々に、医療と学びを

医療を届け続けるため、私たちに出来ることを

クーデター以降5年以上経っても、依然として不安定な状況が続くミャンマー。経済状況の悪化による物価上昇や貧困の増加、軍と民主化勢力との衝突による治安の悪化が今でも続いています。医療面においても、軍政に反対する医療者たちの職務放棄によって、国民の拠りどころである公立病院は機能不全に。何とか機能していても治療を待つ患者さんたちで溢れかえり、数少ない医療者たちは疲弊しています。

そのような状況のなかでクーデター以降、私たちの活動するワッチェ慈善病院には多くの患者さんが医療を求めてやって来ていました。厳しい状況のなか、私たちを頼ってやって来る多くの患者さんたちの期待に応えるべく、時には責任の重さに押し潰されそうになりながらも最大限の医療を提供するべく奮闘する一方、大きな治療を乗り越えて笑顔で帰っていく患者さんたちを見送りながら、私たちがここで活動することの意義を再認識する瞬間でもありました。



ワッチェ病院で過ごす子どもたち



出張診療の様子

そして今、ワッチェ病院周辺の治安の更なる悪化によって、患者さんたちが病院まで辿りつくことが難しくなっています。2025年3月末に発生したミャンマー大地震による手術活動の一時休止も重なり、外来にやって来れる患者さんの数は以前の半分、手術件数も3分の1ほどに減っています。

医療を必要としていても、治安や経済的な問題によって病院まで辿りつけない患者さんたちが沢山いることを、ここで長く活動する私たちはよく知っています。そのため、病院にやって来る患者さんの診察だけでなく、定期的に私たち医療者が地域に出向いて医療活動を行う、出張診療も積極的に行っています。内戦から逃れてきた避難民が多く暮らすお寺や寺子屋、そして高齢者施設など、2025年度は10ヶ所で約1,000名の患者さんを診察しました。一人でも多く医療を届けるため私たちに何ができるのか、そんなことを常に考えながら活動を行っています。

また、最大都市・ヤンゴン郊外の医療活動拠点でも定期的に手術活動を行うとともに、子ども専門病院に日本人専門家を招いての高度かつ専門的な治療のサポートや、現地の専門医の育成にも注力しています。2年前よりサポートしている小児心臓病分野では、2025年度は日本人の小児循環器専門医が4回に渡って活動を行い、55名の心臓病の子どもの治療のサポートを実施しました。

現在、多くの症例は現地医師のみで実施できるようになってきているため、日本チームの渡航時には現地の医師だけでは対応の難しい症例が集められ、それらの治療にともにあたる形へと変化しています。専門的医療人材の育成は時間と労力がかかりますが、この厳しいミャンマーの医療環境のなかでも少しずつ成果が見え始めています。

クーデターに大地震と、ここ数年はさまざまな困難が見舞われているミャンマーですが、そんななかでも一人でも多くの人に医療を届けるため、私たちは諦めることなく「私たちだからできること」に挑戦し続けています。



日本人医師と心臓病の子どもたち

ミャンマー児童養育施設 Dream Train

揺らぐ社会のなかで、それでも「可能性」を手放さないために

社会情勢の不安定さが長期化するミャンマーで、貧困や教育機会の格差はさらに深刻さを増し、「学校に通うこと」そのものが特別な機会になりつつあります。この現実を背景に、今年度の養育施設 Dream Train への新規入所希望者は110名にのぼりました。教育を受けたい—その切実な願いが、これまで以上に強く存在していることを感じています。

しかし、私たちが受け入れられる人数には限りがあります。「夢を叶えたい」「家族を支えられる大人になりたい」そんなまっすぐな想いを持った多くの子どもたちに機会を届けたいという願いと限られた環境との狭間で、今年も慎重な選考を重ねてきました。



積極的に学ぶ姿勢が印象的なDream Trainの子どもたち



グループワークで子どもたちが描いた「心の公園」

国際情勢の影響による燃料不足や価格高騰など、さまざまな要因が重なり、多くを輸入に頼るこの国では、コストの増大が避けられない状況です。それでもなお、支えてくださる皆さまの想いが形となり始めた今、子どもたちに安全で安心で居場所を届けるための歩みを止めることはできません。

一人でも多くの子どもたちが夢を描ける社会に近づけるよう、責任を胸にこのプロジェクトを着実に前へと進めていきます。Dream Trainの挑戦を、これからも応援していただけますと幸いです。

施設内では、子どもたちの成長段階や関心に応じたプログラムの充実を図ってきました。基礎学力の定着に加え、語学やアート講座などを通して、自ら考え、表現する力を育んでいます。希望者に私立学校への進学機会を提供するスカラシップ制度も継続しています。こうした多様な学びの積み重ねが、「わかる」「できる」という実感につながり、以前は「学ぶこと」に苦手意識を持っていた子が自ら机に向かうようになるなど、小さな変化として表れています。

学びは教室の中にとどまりません。限られた状況でも、子どもたちが社会や世界とつながる機会を大切にしてきました。異なる価値観に触れることで「自分の世界はもっと広いかもしれない」と感じる瞬間が、一人ひとりの視野を確実に押し広げています。

一方、施設環境の課題は年々深刻さを増しています。老朽化した建物では、雨漏りや浸水が発生し、衛生面や安全面に不安が残ります。寝室や学習スペースも十分とは言えず、子どもたちの成長段階に応じた生活環境を整えることが難しい状況が続いています。さらに、昨年発生した地震を受け、災害時にも子どもたちの命を守る環境整備の必要性をより強く認識することになりました。

こうした課題に向き合うため、Dream Trainはリニューアルプロジェクトを進めています。今年2月には、インフラ整備を通じて子どもたちの暮らしと健康を守ることを目的としたクラウドファンディングを実施し、多くの方々のご支援により目標金額の180%を達成することができました。さらに助成金の採択もあり、新棟建設を通じた生活基盤の整備を着実に進めることが可能となっています。



新棟建設へ向けた地鎮祭の様子

03 ラオス 医療の形が整いつつある、3年間の集大成

質の高い医療をより多くの人へ—— ラオスの未来につながる取り組みを

術後説明を行うラオス人医師と、
それを見守る原医師(左から3番目)、児玉医師(左手前)

ラオス北部のウドムサイ県病院で進めている甲状腺疾患治療の技術移転プロジェクトは、3年間の総仕上げの段階にあります。現地医療者による診療体制の確立に向け、これまでの積み重ねをもとに、より実践的な力を定着させるフェーズです。

これまで11回の手術活動を行ってきたなかで、現地医師が主体的に手術に関わる機会が着実に増加。現在では、標準的な症例においては現地医師が執刀と第一助手を担い、日本人医師はサポートや見守りとして関与する体制が基本となりつつあります。また、現地の状況に合わせた安全管理を導入するなかで、ラオス人看護師が自ら術後出血の兆候に気づいて報告し、適切な処置につながったケースもありました。

内科診療においても現地医師のニーズを踏まえた指導を継続しており、見た目の所見に頼らず、症状から診断につなげるといった診療の質の向上が見られています。さらに、術前診察の段階で内科医師から外科医師へ積極的に情報共有が行われるなど、内科と外科の連携も少しずつ形になってきました。医師による術前・術後の患者さんへの説明や、看護師による周術期の関わり方においても、日本人医療者の姿勢を見て、自ら実践しようとする変化が現れています。

こうした進展を踏まえ、プロジェクトの延長や、その先のPhase3も見据えた検討を進めています。限られた医療資源の中でも、現地の医療者が自ら判断し、質の高い診療を継続できる体制をどのように実現していくか—その重要な転換点に立っています。



地方病院訪問には子ども病院の医師も同行し、レクチャーを実施

医療者との関係構築や情報共有を進めています。各地域の病院では、検査や専門医へのアクセスの限界、適切なタイミングでの紹介の難しさといった課題が見えてきました。そうした現場の声を受け止めながら、子どもたちをより早く、確実に治療へつなげる方法を模索しています。

この大きな課題を、私たちだけで解決することは簡単ではありません。それでも、目の前の一人ひとりの患者さんに向き合いながら、地域とのつながりを広げ、小さな仕組みを積み重ねていくことが未来につながると信じています。

どんな場所に生まれても、必要な医療にたどり着けるように。ラオスの子どもたちの命を守る挑戦は、これからも続きます。

首都ビエンチャンで推進している小児固形がん周手術期治療技術移転プロジェクトは、日本とラオスの医療者が連携しながら、手術活動や化学療法指導を継続的に行う体制が整いつつあります。

一方で、この活動を通じて改めて浮き彫りになっているのが、「必要な医療にたどり着くことの難しさ」です。ラオスでは、特に地方に住む家族にとって、経済的・地理的な要因から都市部の病院を受診すること自体が大きな負担となります。さらに、診断や治療に時間がかかるなかで、経済的な事情や文化的背景により、治療を断念してしまうケースも少なくありません。これはプロジェクト開始当初から認識していた課題ですが、現場で患者さんと向き合うなかで、その壁の高さをより強く実感しています。

こうした状況に対し、私たちは地方の医療機関を訪問し、現地医



地方訪問では治療を終えた最初の患者さん
ソンサイくんにも会えました

04 災害支援・対策

能登半島地震中長期支援活動 ～慢性期の新たな支援の形～

能登の人々の健康サポートと、中高生へ向けた出張講義

2024年6月から開始したサロン活動「おしゃべり喫茶」は、住民自身によるサロン開催の復活に伴い開催規模を縮小し、現在は輪島市3地区と能登町1地区のみで継続開催を行っています。当初からの来場者数はのべ1,710名となりましたが、女性が8割以上を占め、男性参加者が少ないことが課題のひとつとなっていました。そこで、3月より名称を「おげんきクラブ」に変更し、歓談ベースの内容から体操や簡単な運動などのリハビリテーション要素を強化することで、高齢の方々の活動性向上に努めています。

昨年11月からは新たな課題に対処するため、社会福祉協議会の協力を受けて「健康チェック企画」を開始しました。高血圧や静脈血栓塞栓症（エコノミークラス症候群）などの健康リスクは発災から数年間は継続するとの研究データがあり、能登地域でも引き続き災害関連死の防止施策が必要な状況です。一方、交通インフラや住環境の変化によって震災前と比較して病院受診率が低下しているという声が聞かれたため、ジャパンハートでは医師、看護師やコメディカルで形成された支援チームを派遣し、心電図検査やエコー画像診断、体力・認知テストを行うことで、ご自身の健康状態を確認していただく企画を実施しました。初回は輪島市内2地区の公民館をお借りして、計42名の方にお越しいただき、心電図の不調や受診控えのあった方を対象に地域医療機関への受診勧奨を行いました。



健康チェックを行うiERボランティアスタッフ



ジャパンハートの活動や、医療者の仕事について紹介しました



一次救命処置を体験

また、2025年2月からは、高齢の方だけでなく若者にも支援を届けるべく、教育機関の集約が進む能登地域の中高生向けに、キャリア教育と一次救命処置（心臓マッサージとAED）が一体となった出張講義を行っています。4月現在、能登町、輪島市、七尾市、志賀町の計5校で開催し、中高生228名が受講しました。ジャパンハートからは、国際NGOの活動や看護師およびコメディカルの仕事とやりがいについて紹介したほか、救命士を目指す大学生が将来の夢や授業についての座談会を行い、実技で一次救命処置を学ぶことで医療を身近なものにしてもらうことを目指しました。受講生からは、「国際協力に関心があり、現状や課題などを知ることができて、とてもいい経験になった。今後の進学の参考にしたい」「命について学ぶことができた。人が倒れた時、怖がらずに助けに行けるようになりたいと思った」「実際にやってみて、救命は一人ではできないと感じた。共助で助け合うことが大事だと分かった」など、たくさんの感想をいただきました。

2024年1月1日に発生した能登半島地震から2年以上が経ちますが、ジャパンハートはこれからも、その時々に応じて形を変えながら支援活動を続けていきます。

小児がんと向き合う子どもたちの応援団

05 スマイルスマイルプロジェクト

家族の恒例行事をもう一度—ディズニーランドで過ごす特別な時間

スマイルスマイルプロジェクトは小児がんと向き合う子どもとご家族のお出かけやご旅行にジャパンハートの医療者が付き添い、思い出づくりをお手伝いする活動です。今回はこうくんとご家族のクリスマスディズニーへのお出かけの様子をご紹介します。

こうくんとご家族は、お誕生日にディズニーのホテルに宿泊してパークで過ごすことが恒例行事だったそうです。「また家族でゆっくりお泊りして、部屋からショーを見られたらいいな」と思う一方でお出かけに対する不安も大きく、そんなご家族の想いを病院のスタッフの方々が私たちに繋いで下さいました。

入園後は早速、ご家族みんなでクリスマスのショーを鑑賞しました。楽しい音楽とともにミッキーやサンタさんたちが近づいてくると少し目を開けてくれたこうくんとご家族は「すごいね、かわいいね」と話しながら、クリスマスの雰囲気を楽しみました。その後、パークが一望できるホテルの部屋でゆっくり過ごすなか、スタッフも少しだけお手伝いさせていただき、こうくんは久しぶりにお母さんの腕の中へ。「抱っこなんてひさしぶりです、嬉しい」とお母さん。大好きなお母さんの膝の上でリラックスした表情のこうくん。とても穏やかでかけがえのないひとときでした。夜は大本命であったハーバーショーを部屋からみんなで鑑賞し、翌日ホテルスタッフのみなさんに見送っていただき、帰路につきました。



家族思い出の場所でゆったりと過ごしてもらうことができました

旅行後、ご家族から「要介護状態で外出するのが初めてでしたが、持ち物リストやタイムスケジュールなど、事前準備をしっかりと

していただき、お出かけ当日も看護師さんがそばにいてというだけで安心して過ごすことができました。子どもだけでなく家族みんなのこともたくさん考えていただき、笑顔で楽しく過ごすことができました。ありがとうございました」とメッセージをいただきました。

ご家族が笑顔で過ごす時間はとても尊いものだと、改めて私たちも感じています。

小児がん啓発活動・レモネードスタンド

スマイルスマイルプロジェクトでは、まだ十分に知られているとは言えない小児がんについて、ひとりでも多くの方に知っていただきたいという思いから、昨年度よりレモネードスタンドを実施しています。

当日、ブースの運営をお手伝いして下さった、ボランティアのメッセージをご紹介します。

私自身、小児がんという病気は知っていましたが、関心を持つまでは至っておらず、きっかけは孫が産まれてからでした。

ブースでは「レモネードいかがですかー！小児がん支援の為のレモネードスタンドやっていますー！」と大きな声で何度もお声がけします。

立ち止まって興味を持ってくださった方々は元より、ブースを素通りされて行く方々にも私たちがこうやってお声がけすることによって、頭の片隅にでも「小児がん」という言葉が耳に入り、後に興味に繋がったり、はたまた掘り下げてみようと思うきっかけになれば良いな、と思います。

SSPサポーターにご協力いただき、運営しています



レモネードスタンドを通じて小児がんに関心を持っていただくことが、病気と向き合う子どもたちへの大きな応援になります。

※レモネードスタンド・・・小児がんを患ったアメリカの少女が、自分と同じように病気と向き合う子どもたちのために治療の研究費を病院に寄付しようと、自宅の庭でレモネードスタンドを開いたことをきっかけに広まった、小児がん支援の社会貢献活動。